

前章では、日本国内の外国とのつながりをもつ子ども、とくに見えにくい外国とのつながりをもつ子ども達の存在と教育について概観しました。本章では、その中で日本語指導が必要な子どものことばの問題について考えます。

## 1 母語と第二言語

### 1 母語とは

あなたの母語は何語ですか。

日本で生活している多くの「日本人」は、何の迷いもなく「日本語です」と答えるでしょう。「あなたの母国語は何ですか。」この質問に対しても、多くの「日本人」が「日本語です」と答えるのではないのでしょうか。しかし、実は「母語」というのは定義の難しい言葉です。少し視野を広げて考えてみましょう。国外からの移住者の多いカナダやオーストラリア、ヨーロッパなどの国々では、この質問に簡単に答えられない人がたくさんいます。そして、今現在、日本社会も加速度的に多文化共生社会に進み始めています。例えば、次のA君の場合を考えて見ましょう。

A君は日本人のお父さんと中国人のお母さんと一緒に小学4年生のときに日本にきました。日本に来てまもなく両親は離婚しましたが、お母さんと日本で暮らすことになりました。A君は家庭内でのお母さんとのコミュニケーションは中国語のみですが、日本の公立学校で日本語による教育を受けています。中国語でおしゃべりできますが、読み書きは苦手なようです。

フィンランドのバイリンガル学者、スクットナブ・カンガスは、「母語」とは、その人が初めて覚え(習得の順序)、もっともよく使え(到達度)、最も頻繁に使う(使用頻度)言語で、自分自身がアイデンティティを持てる(内的アイデンティティ)言語である、さらに他者からも母語話者だと思われる(外的アイデンティティ)言語である、としています(Skutnabb-Kangas1981;35p)<sup>(1)</sup>。このような5つの側面からの定義からもわかるように、この一見して簡単な「母語は何か」という質問は、実はとても複雑な問題をはらんでいることがわかります。A君にとって母語は何語なのかも単純な問題ではなさそうです。ちなみに「母国語」という言葉は「母語」と同義で使われることがありますが、「母国」という部分が表すように、この言葉には「国籍」といった国家制度的な意味合いが含まれます。A君の場合には「母語」と「母国語」が別の言語の可能性もあります。

### 2 母語と第二言語

母語を習得したあとに習得した言語は「第二言語」と呼ばれます。上記A君の場合には、どちらを母語と考えるかは別にして、日本語と中国語の2つの言語ができる可能性があるといえます。2つの言語が「できる」状態を「バイリンガル」と言います。しかし一言に「バイリンガル」と言ってもそれぞれの言語の到達度のあり方は多様で、それは認知面、学力、知的発達にも影響を与えていると言われています。カナダのバイリンガル研究の学者、ジム・カミンズは、バイリンガルを4つのタイプに分類しました。図1を見ると、母語と第二言語のどちらか一方が一定程度習得できている場合は知的発達に影響は出ないが、両方の到達度が一定程度に達している場合は正の影響が出ることがわかります<sup>(2)</sup>。一方、両方の言語が十分に習得できていない場合は知的発達に負の影響が出ることは右図を見なくても容易に想像できるでしょう。

バイリンガル研究では、2つの言語が互いに関係しあい、共有面を持っているという説が一般的です。前述のカミンズは、文法構造や表記法など表層面では違うものに見える2つの言語は、その深層面にある思考や概念理解にかかわる認知面は共有している、つまり1つの言語で獲得した思考はもうひとつの言語でも活用できるとしました(「2言語共有説」(図2))。

日本語指導が必要な子どもの場合も、それぞれの子どもの言語の習得状況、発達の段階、かれらを取り巻く環境など、子どもや家族のこれまでと現在、そしてこれからを踏まえつつ、2つのことばの力を視野に入れた支援が必要です。

図1 2言語の到達度による分類(カミンズ)

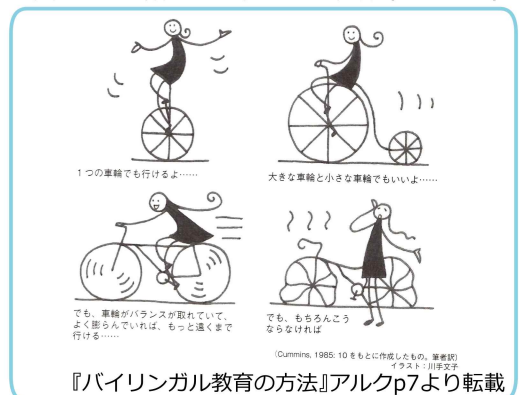
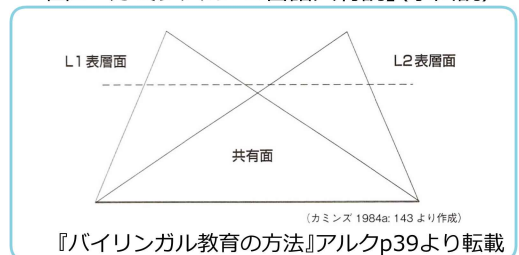


図2 カミンズの「2言語共有説」(冰山説)



1. Skutnabb-Kangas, T.(1981)*Bilingualism or Not: The Education of Minorities*. Clevedon, UK: Multilingual Matters  
2. 中島和子(1998)『バイリンガル教育の方法』アルク

## 2 第二言語としての日本語

### 1 コミュニケーション能力とは何か

みなさんは、よく理解できない言語の世界に身をおいた経験がありますか。分からない音、分からない文字の世界で過ごすことは、チャレンジングでワクワクすることであると同時に、不安感を伴うことでもあると思います。日本語を母語とする多くの「日本人」にとって、日本語は自然に習得された言語でしょうが、日本語を第二言語として習得する人たちが、日本語ばかりの世界の中に身をおくときの不安感を想像してみてください。

Canale & Swain(1980)<sup>(3)</sup>、Canale(1983)<sup>(4)</sup>は言語能力とコミュニケーション能力として次の4つの要素を挙げています。表1に示されているように、語彙や文構造の理解だけでなく、場面によってことばを使い分けたり、会話を成り立たせたり、うまく意思疎通ができない場合に対応したりすることも、ことばが「できる」ためには必要な要素です。第二言語としての日本語を考える場合にも、この4つの要素を考慮しなければなりません。次節では、特に文法能力を例に挙げ、日本語を第二言語として捉える体験をしてみます。

表1 コミュニケーション能力(例：話す)

	能力の定義	関連する技能や知識
文法能力	言語を文法的に正しく理解し使用する能力	文法、語彙、発音、文字・表記
社会言語能力	相手との関係や場面に応じて、いろいろなルールを守って言語を適切に使用する能力	相手や場面によるスピーチスタイルの選択、話題の選択、非言語行動
談話能力	談話を管理し、組み立てることができる能力	会話の開始、継続、終了のしかた、あいづちの打ち方、話題の転換や展開のしかた、発話の順番とり
ストラテジー能力	コミュニケーションがうまくいかなかったときに、自分や相手の発話をコントロールして修復する能力	自分の発話の調整(ほかの表現への言い換え、説明、母語使用)、相手への援助要請(聞き返し)

『国際交流基金日本語教授法シリーズ6 話すことを教える』p20より

### 2 第二言語としての日本語を考える①～文字・表記～

日本語の表記の特徴を考えてみましょう。皆さんにとって少し馴染みのある英語と中国語の表記と比較して、日本語の表記体系の特徴を説明してみてください。

- <日本語> 私は毎日スーパーに買い物に行きます。
- <英語> I go to the supermarket every day.
- <中国語> 我每天都去超市。

日本語の表記方法は英語や中国語と比べて複雑だと言われています。それは、文字が複数あることに起因しています。日本語は一般的に漢字、ひらがな、カタカナを使う漢字かな混じり文で表記されます。漢字は、一般的に文の中の実質的な意味を持つ部分、ひらがなは文法的な機能を担う部分(助詞や動詞・形容詞の活用部分)を表記するのに使います。一方、カタカナはいわゆる外来語を表記するのに使います。このように複数の文字をもつ言語は世界的に珍しく、第二言語として日本語を学ぶ人たちにとっての困難点になっています。しかし一方で、漢字かな混じり文で表記することは悪いことばかりではありません。試しにすべての文字をひらがなで書いて読んでみると、意味がつかみにくいなと感じると思います。漢字かな混じり文の場合、文中の漢字の意味が分かれば、大意を早くつかむことが可能だからです。また複数の文字で文節が明示されていますので、英語のように分かち書きをする必要もありません。あなたが日本語母語話者だったら、日本語を読むことが難しい外国人に対して「漢字は難しいからすべてひらがなで書いてあげよう」と考えるかもしれません。しかし、3つの文字を使うことで意味のまとまりが視覚的に理解できると考えると、すべてひらがなで書くより漢字にルビをふったほうが親切かもしれません。

母語の表記に漢字を使わない非漢字圏の人にとってだけでなく、漢字圏の人たちにとっても日本語の漢字は難しいと言われています。1つ例を挙げましょう。「褥そう(じょくそう)」という単語を知っていますか。医療現場で使われる単語で「床ずれ」を意味します。ここに使われている漢字「褥」は画数も多く、常用漢字にも含まれません。では「生きる」という単語に使われる「生」と「褥」はどちらが難しいでしょうか。現在日本に増えているインドネシア人介護福祉士の方たちに聞くと、「生」のほうが難しいという答えが多いそうです。意外に思う人も多いかもしれません。しかし理由は簡単です。「褥」は画数が多く形は複雑ですが、日常生活場面等で見かけることは稀なので、「褥そう」という言葉で記号として覚えれば十分です。一方「生」は形は単純ですが、日常生活場面で見かける様々な言葉に使われ、「生きる」「誕生日」「先生」「一生」「生ビール」等々、その読み方は1つではありません。厄介なことにはどの言葉の中でどの読み方をするかの明確な規則もありません。

3. Canale, M. and Swain, M. (1980) "Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing," *Applied Linguistics*.1(1) pp. 1-47.
4. Canale, M. (1983). From communicative competence to communicative language pedagogy. In J.C. Richards & R. Schmidt (Eds.). *Language and communication*. pp.2-27. London: Longman.

### 3 第二言語としての日本語を考える②～文法(言語形式)～

では、次に日本語の文法(言語形式)について考えてみましょう。まず( )の中の動詞の形を正しく変えてみてください。

- (1)ここに なまえを(かきます→ )ください。
- (2)しょうどうへ(いきます→ )から、きょうしつへ行きます。
- (3)きょうしつで おちゃを(のみます→ )はいけません。
- (4)田中さんがタクシーを(よびます→ )くれました。
- (5)すみません、スプーンを(とります→ )いただけませんか。
- (6)あしたはパーティですから、ケーキを(かいます→ )おきます。
- (7)田中さん、おそいですね。先に行きましようか。  
-そうですね。でもわたしはもうすこし(まちます→ )みます。
- (8)あ、ごめんなさい。データを(けします→ )しまいました。
- (9)早くおきてください。 -もう(おきます→ )いますよ。
- (10)わかりませんから、答えを(みる→ )もいいですか。

上記(1)～(10)の空欄の中に入る言葉を見ると、すべて「<動詞>て」だということに気づくでしょう。日本語教育ではこの形を「(動詞の)て形」と呼びます。では、第二言語として日本語を学ぶ場合、動詞の「て形」の活用のしかたはどのように理解されるのでしょうか。動詞の「て形」の活用規則を説明してみましょう。日本語を第二言語として学び始めた人にとって、この動詞のて形の活用規則を習得するのは大きなハードルだと言われています。規則を帰納的に見つける体験をしてみると、日本語母語話者にもその難しさが容易に想像できるのではないのでしょうか。本書には正解を書きませんので、いろいろな動詞のて形を眺めながら、日本語の文法規則を探してみてください。

これら2つの例からは、日本語の難しさを考えるとき、第二言語としての日本語という視点を持つことが重要だということが分かります。

本節では文法能力に焦点をあてましたが、ほかの能力についても第二言語としての日本語の特徴を探してみましょう。もしあなたが日本語母語話者だったら、どんな配慮が日本語を第二言語として習得する人たちにとって役に立つことなのか想像できるようになるかもしれません。日本語支援の必要な子ども達の困難点を考える場合には、言語習得の問題だけでなく、そのほかの様々な要因(例えば発達の問題や環境など)も考え合わせる必要があります。しかし、教師自身が第二言語を学ぶ経験を持ったり、第二言語として日本語を感じてみたりすることは、日本語支援が必要な子ども達をより深く理解するのに役立つでしょう。

## 3 子どもの成長と発達を支える日本語の支援

日本語支援が必要な子どもにとって日本語を学ぶことにはどのような意味があるのでしょうか。成人が外国語として日本語を学ぶ場合と大きく違うのは、単に日本語の言語知識や技能の獲得を目的とするのではなく、ことばによって子どもの世界を広げ成長・発達を支えることを目的としており、日本語指導を通じて、学校・社会生活、学習・認知面の発達、アイデンティティ形成・自己実現という3つの側面を支える必要があるという点です(齋藤2011)<sup>5)</sup>。ここでは、子どもの成長と発達を支える日本語の支援について、「生活言語」と「学習言語」に焦点をあてて考えてみましょう。

### 1 生活言語と学習言語

子ども達の学びを支えるのに必要なことばの力とはどのようなものなのでしょうか。

1で紹介したA君についてもう少し考えてみます。来日当初は日本語がほとんど分からなかったA君も2年が経ち現在6年生です。教室でも友達と楽しそうにおしゃべりする様子が見られるようになりました。そのような姿を見ると、A君にはもう日本語面での問題は何もなく、支援も必要ないと思うかもしれません。しかし、そう判断するにはもう少し慎重にA君をみる必要があります。バイリンガル研究の成果からは、一般的に約2年でおしゃべりができるようになりますが、第二言語で教科学習ができるようになるのには、8歳以降に入学した場合は5～7年、8歳以前に入学した場合は7～10年かかることがわかっています。前者は生活言語、後者は学習言語と呼ばれます。つまり、A君の場合も生活言語はある程度身についたものの、学習言語の習得は不十分で日本語での教科学習は困難な状況にあるかもしれないのです。

### 2 教科学習のための日本語

日本語の支援が必要な子どもはどのようなところで学習のつまずきを感じるのか、生活言語と学習言語の違いに注目して考えてみましょう。図3は算数科2年生「三角形と四角形」の単元です。この単元の目標は、辺や頂点などの構成要素に着目して、三角形や四角形、長方形や正方形などの特徴を見出すことができることですから、日本語支援が必要な子ども図3 算数科の教科書の例を含むすべての子どもがこの学習目標を達成できるよう指導します。教科書の中では三角形の特徴は「3本の直線でかこまれた形

5. 齋藤ひろみ編著(2011)『外国人児童生徒のための支援ガイドブック 子どもたちのライフコースによりそって』凡人社

を三角形といいます」と説明されていますが、日常生活では「3本のまっすぐな線と線がくっついている形」と言うことも多いかもしれません。しかし、小学2年生の算数科の学習では「直線」「～でかこまれた」という言葉を使うことが求められます。さらに小学校高学年になると、学習言語として漢語が多用されるようになります。日本語支援の必要な子どもには生活言語と対応させながら学習言語を習得できるよう工夫が必要です。

また、同じ言葉でも生活言語と学習言語では意味に異同がある場合もあります。例えば「比べる」という動詞です。日常生活の中では「お兄ちゃんと比べるとぼくのほうが背が低い」等々、2つ以上のものや事柄の「違い」に言及することが多いです。一方、社会科で見かける「A市の状況とあなたのまちを比べてみよう」という学習活動では、A市と居住地域の「違い」だけでなく、「同じ点」についても言及することが求められます。さらに、学習言語の難しさは生活言語との違いだけではなく、たとえば、学年によっても表現が変わることにも注意が必要です。たとえば、算数科では「半分にわける」「2つに分けた1つ分」という表現は、学年があがると「等分する」「2等分した1つ分」という表現に変わります。

このような生活言語と学習言語の違いが理解できていない場合、学習に困難が生じてしまいます。

### 3 教科学習における支援

日本語支援が必要な子どもの支援にあたっては、教科の単元目標を下げることなく教科学習が行えるような支援をする必要があります。母語ですでに学んだ学習内容であれば、その知識に日本語をのせていけばよいだけだと思うかもしれませんが、それでは問題が起こる場合もあります。それは、母語で習った方法と日本の方法が違う場合が多々あるからです。たとえば、算数科の場合、数字の正しい字形が違ったり、割り算の筆算の仕方が違ったりします。割り算の筆算を例にしてみましょう。みなさんは「 $475 \div 6$ 」の割り算の筆算のやり方をどのように習いましたか。たとえばブラジルでは図4のようなやり方で習います。

さらにブラジルでは筆算のやり方は厳密に決められておらず、教師が教えた以外のやり方も肯定的に評価されることがあると聞いたことがあります。これも学校文化の大きな違いでしょう。いずれにしても日本では教科の学習は学年が上がるごとに知識や技能を積み上げながら進んでいきますので、子どもがすでに学んだ内容であっても日本のやり方を知っておく必要があると言えます。また、学習内容とことばを同時に学んでいく必要がある場合も少なくありません。母語がしっかり身につけている場合は、母語の力を活用して学習内容を理解しながら、日本語を学ぶことも可能です。

一方、学習内容について未習で日本語も不十分な場合はどうしたらいいでしょうか。注意したい点は教科の単元目標を下げないということです。つまり、日本語指導が必要な子どもであっても、教科の目標はそのほかの子どもと同じであるということです。もちろん日本語で学べるよう指導には工夫が必要です。たとえば、教科書やプリントにルビをふると、耳で聞いたことがある日本語の知識と結びつけることが可能ですし、辞書が使える子どもは自分で調べることも可能です。また、教科の単元目標を変えないでやさしい日本語で内容を書き換える(リライト)という方法も有効です。

さらにその単元の学習を学ぶうえで重要な教科用語を取り出して説明したり、具体物を提示しながら説明したり、複雑な学習内容については細かく学習課題を設定して段階的に学べる工夫をしたりすると、子どもが学ぶ際の助けになると思います。これは、日本語の支援が必要な子どもに対してだけでなく、そのほかの学習につまずきを感じている子どもにとっても有効な方法です。日本語の支援が必要な子どもにとって有効な支援はそのほかの子どもにとってのわかりやすい授業につながる人が多いです。

## 4 日本語支援が必要な子どもの学びを支えるための連携

もし将来、あなたが担任をする学級に日本語支援の必要な子どもがいたらどう感じますか。「面倒くさい仕事が増えるなあ」「ことばができないから指導できないんじゃないか」と後ろ向きに感じる人もいるかもしれませんね。たしかに子どものことばや習慣、生育環境や滞在期間は多様です。また生活への適応や日本語・母語の支援の問題、特別支援の要否、彼らのキャリア形成など教育の課題は複雑です。あなた自身が経験してきた事柄との違いから戸惑いを覚えることも多いかもしれません。平成26年には学校教育法施行規則の一部が改正され、それまで正規の教育課程に位置づけられていなかった日本語指導が「特別の教育課程」とし

図3 算数科の教科書の例

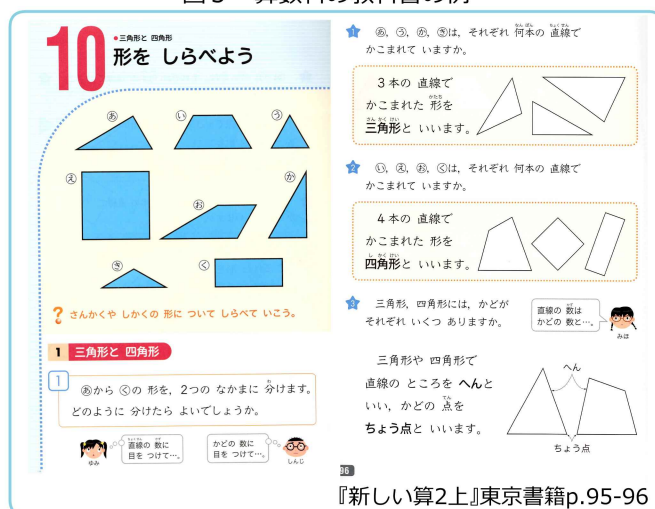


図4 ブラジルの筆算のやり方(例:  $475 \div 6$ )

1)  $475 \div 6$ を筆算の形にする。

$$\begin{array}{r} 475 \quad | \quad 6 \\ \hline \end{array}$$

2)  $6 \times 7 = 42 \rightarrow 47 - 42 = 5$ の順で暗算し5を書く。その右に5をおろす。

$$\begin{array}{r} 475 \quad | \quad 6 \\ 55 \quad \quad | \quad 7 \\ \hline \end{array}$$

3)  $6 \times 9 = 54 \rightarrow 55 - 54 = 1$ の順で暗算し、1を書く。

$$\begin{array}{r} 475 \quad | \quad 6 \\ 55 \quad \quad | \quad 79 \\ 1 \quad \quad \quad | \\ \hline \end{array}$$

答え: 79 あまり1

て認められることになりました。また新学習指導要領の総則(第3章第4節2)にも外国につながる子ども達への特別な配慮について言及されています。直接子どもにかかわる学級担任一人でこの問題を抱え込むのではなく、校長をはじめとするすべての先生たち、子どもの家庭や地域との連携によって、子ども達の成長と発達を支えていこうとする態度が大切です。そして何よりも、「外国につながりをもつ」という部分だけに目を向けるのではなく、個としての子どもの姿をしっかりと見つめることは、きっとみなさんの教師としての成長につながります。個々の子どもの姿をよく見て、その子どもの将来も見据えるという教師としての態度は、外国につながる子どもにだけでなく、すべての子どもに対するものと同様だからです。教師になる前に、ぜひみなさん自身が文化的、言語的な多様性に触れる機会を多く持ち、教師になったときそのことを実感できるよう準備をしてほしいと思います。